

Title	アッシャー著 地中海ヨーロッパにおける預金銀行業務の初期の歴史
Sub Title	Usher, Abbott Paydon. "The early history of deposit banking in mediterranean Europe"
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.2 (1954. 2) ,p.181(73)- 184(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19540201-0073
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540201-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540201-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

僅かしかないという事實を説明していると云う。ハンセンの財政政策と景氣循環」(一九四二年)に關する魅力のある展望は、對象の取扱ひ方に於て、短期的な現象でありまた均衡を缺いている(偏つてゐる)ことを特に強調しなければならぬ。このハンセンの書よりも完全性の多いものとして、マレン、ブラウソリの「財政の經濟學」Allen and Brownlee, *Economics of Public Finance* (1947)があり、また最もよく綜合したものはサマソンの「財政と國民所得」Somers, *Public Finance and National Income* (1949)と示されてゐる。サマソンの於ても、ハンセンの場合の如く、Fiscal Policyの景氣政策的機能が強調されているが、Fiscal Policyと貨幣・信用政策との間に存在する密接な關連が輕視されている。サマソンは四の財政手段——支出・租税・借入・債務償還に區別して、それらを consumption funds と loanable funds の吸収と放出 (absorption, release) とする二の見地で研究していることに特徴がある。他の綜合的勞作で表式的な分類を避けているものがあるが、例えばU・Kヒックスの「財政學」Ursula K. Hicks, *Public Finance* (1947)はその見方が驚くほど多様であることを示している。行政的觀察・歴史的觀察・また抽象的な理論的觀察が多彩に入り交つてゐる。またFiscal Theory と同じく租税轉嫁の分析も正當に取扱はれてゐる。しかしケインズに反して、Fiscal Theory と Monetary

の Theory との間の密接な結合は再び解かれて、國債政策の基本的論究は少しも取扱はれていない。カアル・マンは續いて英米財政學の新しい傾向に屬する若干の著作を例示しているが、ここでは餘りに長文になるから省略する。そして結論的部分に移らう。マンは財政學のこの新しい傾向が強い反抗を受けずに確固たる地位を占めるまでになることができないことは豫想されるといふ。正統派の原則をよく辯護してゐるのはモルトンである。C. P. Moulton, *The New Philosophy of Public Debt* (1943)と示されてゐるが、Wright (Wright) が反駁してゐる (The American Economic Review 1943, p. 573—90) いずれにしても、いま Fiscal Theory の優位を云うのは未だ早きに失するかも知れない。實際の財政政策に對するその影響はあるにも拘わらず、Fiscal Theory の廣いグループは互に批判的であり或は對立してゐる。しかし、明かに學界に於てその追隨者が絶えず増大してゐる。Fiscal Theory の滲透は結局アカデミックな見地からも注目し得る。若し財政學が國家活動の資金調達 Finanzierung ということを論ずることが少く、むしろ「財政手段を以てする經濟政策」に向うならば、財政學は再び嘗て古典派の創始者が指示したと同じ地位に自から移つて行く。「自主的財政學」などという夢は終るであらう。また財政學の専門化ということ

もその價値を失うであらう。誇張に失する言であるのは明かであるが、現代の英米の Fiscal Theory の代辯者は、クレマンソンの有名なシニカルな表現を次のように形を變えて、「Fiscal Policy は餘りにも重大な問題であつて財政學の専門家だけに任せては置けない」と云おうとしてゐるのもあらうか——カアル・マンはこの章句を以て、英米財政學の新しい傾向に對する概観と批判とを終つてゐる。

アッシュヤー著

### 「地中海ヨーロッパにおける預金銀行業務の初期の歴史」

渡邊國廣

本書は、地中海に臨む諸國における預金銀行業務に關する研究の第一卷である。本書は、二部に分たれる。第一部において、著者は、個別研究に入る前提として、初期の信用貸付制度について概説している。第二部は、個別研究の最初の例として、カタロニアにおける預金銀行業務の歴史を扱う。以下、この二部を、順を追つて要約してみたい。

第一部の冒頭において、著者は、銀行の本質的な機能が信用貸付の實行にあると述べ、地金の賣買・手形の發行・鑄貨の品

位を維持するための努力といったような活動は、附隨的なものにし過ぎないと主張している。預金の取扱は、預金が貸付金の基礎となるため、銀行にとつて本來的な業務の一つであつた。信用貸付が、著者によれば、地中海に臨む諸國においては、第十三世紀の初頭に盛んにおこなわれ、當時既に目新しいものではなかつたのである。ついで、著者は、初期の銀行制度の顯著な特色を明確にしうとして、銀行の設備と帳簿・預金銀行の業務・銀行間の關係・初期の手形交換制度・流通し得ない手形の意味・信用貸付の増大に對する手形の影響について解説している。

次の二章は、初期における借入證書の發達と、この證書が近代的な商業手形に變化した過程とに關する研究に當てられてゐる。本書のこの部分において、著者は、主として、ルードヴィヒ・ミッターイス、ウイールヘルム・エンデマン、レヴィン・ゴールドシュミット、リヒアルド・エーレンベルグ、カール・フルント、パウエル・ヒュヅェリン等の研究に依存しているが、著者は、これらドイツ人學者が試みた如く、借入證書を、簡單に、證據となる書類、明瞭に書かれた契約の二つに分類することでは満足しない。著者によれば、ドイツ人學者は、發展の最終的な段階にある證書についてだけ分類を試みたのであり、これに先立つ時代の證書に關しては、何の考慮も拂つていなかったのである。しかし、著者の關心は、證書の分類にはなく、むしろ證書を運用する手續にあつた。このため、著者は、

口頭の同意と、それに基ずいて書かれた證書との關係に基礎を置き、新しい三つの型を提案している。

借入證書の流通は、第十七世紀になつて始まつた。中世の商業手形は、譲渡ができて、流通はできず、振出人は、最終の提示者に對し、最初の受取人に支拂を豫定した金額を保證し得たに過ぎなかつた。もつとも、商業手形が流通に供せられたという事例は、早くも第十四世紀に見出すことができるのであるが、しかし、商業手形の流通について、より信頼すべき證據が見られるのは、實に、ナポリやジェノアの法院の判決のうちにおいてであり、正に第十七世紀の初頭のことと屬したのである。同時に、フランドルやオランダの法院の判決からも、第十七世紀に入つて、商業手形が自由に流通し得るようになったことが察知できる。この發展を述べるに當つて、著者は、フレウント、アルヴィリイ、ブルンナーの業績を利用し、むしろこれら諸先學の研究を祖述しているという感が深い。同時に、著者は、新しい資料に基ずいて、商業手形の流通が第十七・八世紀を通じ、ヨーロッパの他の地方においても、法律的に認められるようになって來たことを、附言することを忘れない。

既に、第十四世紀に、イタリー商人は、海外の支店からイタリーの本店に、又イタリーにある本店から海外の支店に振出された爲替手形を、大規模に利用していた。イタリー商人は、大市を訪問した時、爲替手形により決済した。このため、大市が、中世の經濟生活において、より重要な意味を持つて來た時、爲

替手形による決済が、全ヨーロッパの商人の間に、急速に波及して行つた。この點は、第十四世紀のシャンパーニュの大市に關する資料から明白であり、又シャンパーニュの大市について、一四六〇年に設置されたリヨンの大市においても、爲替手形による決済が、現物取引を凌駕していた程であつた。そして、遂に、ジェノアの大市においては、ジェノアの銀行家が振出したり引受けたたりした爲替手形の決済が、唯一の仕事となつたのである。リヨンやジェノアにおいては、爲替手形を決済するための制度が、相當な發展を示すことができた。しかし、著者は、この制度の詳細について、十分な説明をおこなつていない。又大市において流通する爲替手形を、なぜ教會が、高利貸付に抵觸しないものとして簡単に扱つたかについて、筆者の説明はこれ又不十分といわざるを得ない。

第一部における最も興味深い部分は、長期の貸付と、諸都市に對する融通とを扱つた章である。長期の貸付や、諸都市の借入は、中世の經濟生活における最も特徴的な一面であつたが、從來あまり知られていない。この問題については、高度な特殊論文があるに過ぎないのであるが、著者は、これらを總括し、更に独自の研究を加えることによつて、この問題への接近を容易にしてくれた。著者によれば、中世の諸都市が、長期の貸付を獲得するためにおこなつた方法は、既にローマ時代に知られていた。即ち、教會や大土地所有者は、貸付に對する代償として公債を渡されたのであつたが、このような方法が、フラ

ンドル、スペイン、フランスの諸都市により必要な資金を調達するために利用されるようになったのは、實に、第十四世紀に入つてからであつた。そして第十六世紀になつて、この制度が、本格化した規模において遂行されるようになったのであつた。他方、イタリーにおいても、フロレンス、ヴェニス、ジェノアのような諸都市が、大量の借入により經費の調達を企圖していたが、ここでは、海外進出のための出費が意外に老大なものとなつたため、むしろ主たる財源は、壓倒的部分が一般の市民に課せられる税金にあつたのである。

では、信用貸付が、當時の經濟生活において、いかなる意味を持つていたのか。著者は、この問題について、數量的な研究から、信用貸付が、當時において、今日におけると同じくらい重要であつたと結論しているのである。中世の信用貸付について研究したことがある者なら、著者のこの結論が、正當なものであるといふことについて、少しの異論もないに違いない。

第二部は、第一部において概説された貸付の方法や制度の發展を、例證する。著者の長い研究の成果が結實されているのは、實に、本書のこの部分においてである。著者は、カタロニアにおける預金銀行業務の歴史を、一二四〇年から一七二五年までの長い期間にわたつて述べ、最初に、私設の銀行、その組織形態、その記帳の實際について闡説している。私設の銀行は、一般市民のために、受託者・兩替商・貸金の出所として役立つ。一方、バルセロナの市政府も、その財務官として、これ

らの銀行業者を利用していた。しかし、第十四世紀も末期になつて、一般市民も市政府も、私設の銀行の利用をもつては満足できなくなり、かくして、市政府により運営される公設銀行の設置が眞剣に考えられるようになった。そして、預金銀行として知られるかかる組織が、一四〇二年に、その業務を開始した。著者は、この公設銀行の組織・その役員の職能・その帳簿制度・その運営の技術について、詳細に説明している。この銀行は、量目の完全な鑄貨のみを受取ることができた。市民は、その預金を手形によつて移轉することができ、又自由にその預金を引すことができた。しかし、市政府は、必要な出費の調達のために、銀行の基金から借入れることが認められていた。しかもこのことは、銀行が元來市政府の一部に過ぎなかつたという事實によつて、容易に達成された。しかるに、第十五世紀の中葉に、市政府が借入金返済を怠つたため、銀行は、正貨の支拂を一時停止しなければならなかつた。これに對しては、舊來の預金は移轉はできるが、現金には換えられないという方針の下に、銀行業務の整理がおこなわれた。そして新しい勘定が、新しい預金のために起され、銀行業務は間もなく再開した。

この銀行の財源は、市の財源と不可分な關係の下に置かれていた。このため著者は、市の財源・収入源・消費・不足額の補填について闡説している。第十五世紀の初頭における借入のおびただしい増加の主たる原因は、主として戦争や、外國市場か

らの小麦の大量の買付に歸せらるべきものであつた。そして、銀行の貸付が、このために利用されたが、しかし市の財政的必  
要に應ずることは、全く不可能なものであつた。かくして、必  
要な資金の獲得のために、公債の發行に頼らなければならな  
かつた。そして新しい公債が、舊い公債を償還するために、發行  
された。

第十六世紀の末になつて、外國鑄貨のおびただしい流入と、  
カタロニア貨幣の流出とによつて、貨幣制度の上に重大な混亂  
が起つた。第十七世紀に入つて、流通する鑄貨の量目を維持す  
るといふ機能を持つ新しい銀行の設立が計畫された。依然とし  
て活動を續けていた從來の預金銀行は、量目の完全な鑄貨だけ  
しか受取らない規定になつてしたが、一六〇九年に設立された  
バルセロナ市の新しい銀行は、いかなる鑄貨をも受取り、これ  
によつて、貨幣の變化から起る損失を防止し、金融業務の圓滑  
な運行を保證することができた。流通している鑄貨の大部分は  
悪貨であつたため、むしろ新銀行の方が、商人から歓迎され、  
商人のための主要な受託者となることができたのであつた。

第十七世紀の中葉になつて、國王に對する法外な融通から、  
市政府は猛烈な金銭不足に直面しなければならなかつた。市政  
府は、國王に對するこの貸付を、主として新舊二つの銀行から  
の借入によつて賄つていたため、銀行は、一六四一年以來、預  
金の拂戻を停止した。そして、これが、市政府による借入金の  
償還がおこなわれた一六五三年まで續いた。この第二回目的不

幸は、一般的反動と改革とをもたらし、ここに新舊兩銀行は連  
合の運びとなつた。そしてこの計畫が一七〇三年に實現した。  
全體として、本書は、非常に好都合な研究書である。研究の  
對象は、貸付の方法・制度・その實際にまで及んでいる。しか  
も本書の記述は、正確で、明瞭である。ただ、第一部の末尾に  
おいて、著者が言及した中世の貨幣制度についての箇所は、い  
ささか不明確な點があるが、決して本書の價值を減ずることは  
ないであらう。本書は、銀行組織の歴史に關する多くの文献の  
うちでも、最も歓迎されるべき業績にはかならない。(Usher,  
Abbott Payson. "The Early History of Deposit Ban-  
king in Mediterranean Europe" Harvard Economic  
Studies LXXV. Cambridge: Harvard University Press  
1943. Vol. I. pp. xx 649.)

論文紹介

ワード・R・パウエン

『最近の經營數における變化の意義』

(Howard R. Bowen, "Significance of Re-  
cent Changes in the Business Population,"  
The Journal of Marketing, Vol. 10, No. 1,  
July, 1945. pp. 24-34.)

パウエン教授の手に成る此の論文が發表せられたのは、第二  
次世界大戦も漸く大結めに近い一九四五年七月である。そして  
此の論文がその狙いとしたところは、戦時中の經營數の大きな  
變動の分析を通じて、戦後のアメリカ經濟における經營構造、  
特に小賣商業の分野におけるその豫想を展開せんとしたもの  
である。従つて既に終戦以來八年の年月を経過した今日におい  
て、此の論文が持つた實際上の價值そのものは、殆んど失われ  
たと云うべきであるかもしれない。が然し、戦争、そしてそれ  
に伴う經濟統制が經營構造の上に、如何なる幅と深さにおい  
て影響して行つたか、此の點に關する反省はなお今日において  
も無意味ではないと考へ、敢えて筆者は此の論文の紹介を企て  
たのである。

論文紹介

アメリカにおける一九三九年の私企業總數は三三一萬を數え  
(これは人口四〇人につき企業一の割合である)、その雇備總量  
は二八五〇萬餘に達していたのであるが、その内譯は凡そ次の  
如くである。而して全企業中凡そ其の半分は家族労働を多少と  
も包含し

生 産	給 付	總企業中	總雇備量中
1/7	3/5	1/4	1/2
1/7	1/3	1/7	1/3

すぎないものが全企業の九一%を占め、これを更に一〇〇人の  
線にまで擴げるときは、實に九九%に迄も及ぶと云う事實から  
も、小經營の持つ比重がアメリカにおいてさえも依然少くない  
ことが知られる。さてそれはそれとして、今世紀の頭初より四  
一年に至る間の經營の増加力は人口の増加力をかなり上廻つた  
のであり、特に戦争開始前の九年間は「重大な不況からの恢復  
期」にあつたことをその理由として最も大きな經營の増加率を  
示した。即ち開戦時にあつては「一人當り經營數は如何なる時  
期に比しても最高であつた」。而るに眞珠灣事件を峠として漸  
くそれは減少に轉じ、四三年の中頃には不況の低を形成した三  
三年の數と略同數の二八七萬(一九四一年九月に比し一五%の  
減)に落ちてゐる。しかし同年の第二四半期には、早くも此の  
減少速度は鈍化し、それ以後の減少は愈々僅少なものとなり、  
むしろ最近(一九四五年前半)においては、産業によつては増